

忌言葉「ヒロシマへ行く」にみる他界の認識像とその変化

小 口 千 明

一 はじめに

西日本の一部では、人が死去したことを「あの人はヒロシマへ行った」と表現する場合がある。所によっては、「あの人はヒロシマへ茶を買いに行った」などとも用いる。この言葉を用いる人々にとって、「ヒロシマ」は死後の行先として認識されているのである。これらの表現は、「死んだ」という直接的で不吉な響きのある言葉を避け、その代わりとして用いる一種の忌言葉（いみことば）⁽¹⁾である。しかし、いったいなぜ「ヒロシマ」が死後の世界として認識されているのかについては、これまであまり検討されてこなかった。

この言葉の存在が学界に紹介されたのは、昭和一二（一九三七）年、山口麻太郎による『続巻岐島方言集』⁽²⁾が公刊された時のことであった。続いて、同年、その記述に柳田国男が注目し、自らの資料をも合わせて、『民間伝承』誌上に「広島へ煙草を買ひに」⁽³⁾という論考を発表した。しかし、管見の限りでは、その後この問題に関する議論が活発化したとは認められない。俗信に関する民俗学的論考のなかでこの表現が紹介されたり⁽⁴⁾、民俗誌のな

かで、時折この表現の存在が指摘されたり(5)してきてはいるが、「ヒロシマへ行く」という言葉に関していえば、論考というよりは資料紹介に留まる感があった。

ところが、最近になってこの傾向が変わってきた。まず、地理学の分野から、横山昭市がこの言葉に注目した(6)。すなわち、横山は、柳田の論考(7)もふまえたうえで、愛媛県の人々が瀬戸内海を挟んだ対岸地域をどのようにみているかを示す資料の一つになると考えた。これは、この言葉の示す意味内容について、いわば空間認識の観点から問題提起をしたものといえることができる。いっぽう、千葉徳爾は主として民俗学の観点から関心をよせ、この言葉が、いわゆるムラよりも広い空間を人々が日常生活のうえで意識している証拠と考えた。そして、他の事例をも考慮しながら、民俗学でしばしば行なわれるムラ単位の民俗叙述に異議を唱え、ムラという枠にしばられない広域的な民俗叙述の必要性を提唱した(8)。横山、千葉の両研究は、それぞれ目的は異なるものであるが、いずれも単なる事実の紹介ではなく、この言葉の意味内容を検討するうえで有効な新たな視点を提起しており、注目すべきものである。

このように、「ヒロシマへ行く」という言葉に関して、いよいよその意味内容を考察すべき時期にさしかかったといえるのである。本稿は、以上の動向をふまえ、まず「ヒロシマへ行く」という言葉の使用状況について実態を把握し、そのうえで、この言葉の意味内容について若干の考察を行なおうと試みたものである。このような検討によって、この言葉を用いる人々が抱えている死後の世界、すなわち「他界」の認識像が明らかになるものと考えている。

従来、空間の認識像の研究では、当然のこととはいえ、「この世」を人々がどのように認識しているかを取り扱ってきた。それに対し、本稿は、いわば人々が「あの世」をどのように認識しているかという視点である。「あの世」とは死の世界であり、そして、「死」は人々の多くが最も恐れ、忌み嫌うものである。したがって、「死」にまつわ

る空間は、一種の「嫌われ空間」(9)といふことができる。いわゆる「あの世」は、仮に宗教家の説く極楽のような所であったとしても、死なずしてその極楽に行くことはできない。死後の極楽行きを願う者は多いかもしれないが、今、直ちに極楽への旅立ちを奨められても、行きたくは思わないのが人間の常であろう。つまり、認識像の内容がどうであるかにかかわりなく、「あの世」は好まれない空間としての性格をもつ。旅人を見送る時、無事を祈って「ヒロシマへ行く」か「あな(ヒロシマへ行かないように)」という表現が存在している(10)。このような住民の用法に従えば、「ヒロシマ」は「嫌われ空間」としての一面をもっている。ただし、念のために申し添えるが、予断によって「ヒロシマ」を直ちに「広島」とみなすことは誤解につながるおそれがあり、慎まなければならない。この点については、後に詳述したい。

他界の認識像に関しては、そもそも仏教その他、宗教上の諸説が存在する。さらに、それらに加えて、民俗学などからの研究も少なくない(11)。そのようななかで「ヒロシマへ行く」を取り上げた本稿の意図は、ヒロシマが、時として「広島」という具体的な空間として認識されるところに注目しているのである。宗教上の理念や民俗学で論じられる他界像は、イメージのうへの空間であったり、海上、山中といった漠然とした空間である。それに対し、この「ヒロシマ」は、しばしば現実の空間として認識されている。しかし、「ヒロシマ」を「広島」と考えたのでは、説明できないことがらもある。そこで、この点について問題点を整理し、一つの見解を示そうと考えた。忌言葉「ヒロシマへ行く」を理解することは、他界の認識像を理解することであるが、同時に、それは「ヒロシマ」という空間に対する認識像を理解する作業であるといえる。

二 忌言葉「ヒロシマへ行く」の用法

愛媛県内で採取した具体例により、忌言葉「ヒロシマへ行く」の用法を述べてみたい。「あそこのお爺さんはヒロシマへ行った(行った)」。もんで来やへん(戻って来やしない)——これは、あそこのお爺さんはすでに亡くなってしまった、という意味である。「あの人はヒロシマにおるそうな」——あの人は亡くなったのだそうですね、という意味である。「あのお婆さんは、気の毒に、もうヒロシマ行きじゃあ」——あのお婆さんは気の毒なことだが、もう助かる見込みがない、という意味である。

さらに、「ヒロシマへ」を買いに行く」という成句も存在している。「あそこのお爺さんは、ヒロシマへ鍋を買いに行てしもうた」、あるいは「あそこのお爺さんは、ヒロシマへ茶を買いに行た」——どちらも、あそこのお爺さんが亡くなった、の意味である。「ヒロシマへ」を買いに行く」を用いる地域では、単に「ヒロシマへ行く」とだけ用いても通用する。ほかに、大分県の例であるが、近隣で死亡者が相次ぐ状況を「ヒロシマ行きの船が着いている」と表現する成句もある。

このように、「ヒロシマ」は「死」に代わる語として用いられる。例えば「ヒロシマへ茶を買いに行く」という語を耳にした時、商店の主人が広島まで茶を仕入れに行く状況を意味するか、「死」を意味するかの判断は、文脈による。文の構造上は区別がない。アクセントについても同様である。筆者のヒアリングによれば、忌言葉における「ヒロシマ」は、ヒロシマ(、の部分にアクセントあり)と発音されることが一般的であった。これは、地名の広島(広島市)を示す一般的なアクセント⁽¹²⁾と一致している。岡山県の南部⁽¹³⁾では、忌言葉の「ヒロシマ」がヒロシマと発

音される傾向が見出されたが、この地域では地名の広島もヒロシマと発音される場合が多かった。したがって、忌言葉「ヒロシマへ行く」と現実に「広島へ行く」ことの区別は、発音上もなされていないと判断できる。このことから、忌言葉の「ヒロシマ」が地名の広島であるか否かは、用法からだけでは明確にならない。そこで、次にこの忌言葉の分布を調べることによって、「ヒロシマ」と「広島」との関係を検討してゆく。

三 忌言葉「ヒロシマへ行く」の分布

「ヒロシマへ行く」という忌言葉の分布については、これまでのところ広域的な調査はなされていない。民俗誌等による局地的な資料紹介が一部で行なわれたことは、すでに述べた通りであるが、言語の地域差に関心を向ける国語学からも、特に注目された形跡はない⁽⁴⁾。そこで、筆者は、各地の市町村教育委員会の協力を得て、郵便による調査を実施した。その回答を集計したものが表1である。なお、この表には、筆者が現地調査を行なった結果も含めて記入した。また、表1をもとに、行先が「ヒロシマ」とされる忌言葉を図示したものが図1であり、「ヒロシマ」以外の行先の例が図2である。

この資料では、次の二点に注意する必要がある。①「ヒロシマへ行く」等の忌言葉は分布しないと回答があった市町村には、図1にアスタリスク（*印）を記入してある。したがって、記号が何も記されていない地域は、忌言葉の分布がみられないのではなく、未調査⁽⁵⁾を示す。ただし、得られた分布状況から判断して、未調査地域に忌言葉の分布が見出される可能性は少ない。②アスタリスクが記入されている地域においてさらに調査を行なった場合、忌言葉の存在が見出される可能性が皆無とはいえない。一般の分布調査でも問題にされることであるが、「存在する」

行く」等を用いる地域一覧

県	市 町 村	表 現	県	市 町 村	表 現	
愛 媛	越智郡吉海町	ヒロシマへ行く	大 分	東国東郡国見町	ヒロシマへ行く	
	越智郡関前村	ヒロシマへ綿を買いに行く		東国東郡国東町	{ ヒロシマへ茶を買いに行く ヒロシマへ餐付(びんつけ)に行く	
	越智郡波方町	ヒロシマへ茶を買いに行く		東国東郡武蔵町	ヒロシマへ行く	
	越智郡大西町	ヒロシマへ茶を買いに行く		東国東郡安岐町	ヒロシマへ行く	
	越智郡朝倉村	ヒロシマへ茶を買いに行く		東国東郡姫高村	ヒロシマへ行く	
	越智郡玉川町	ヒロシマへ茶を買いに行く		速見郡日出町	ヒロシマへ行く	
	越智郡菊間町	ヒロシマへ牛蒡を掘りに行く		大分郡挾間町	ヒロシマへ行く	
	北 条 市	ヒロシマへ牛蒡を掘りに行く		津 久 見 市	ヒロシマへ行く	
	松 山 市	{		ヒロシマへ茶を買いに行く	佐 伯 市	ヒロシマへ行く
				ヒロシマへ牡蠣を買いに行く	南海部郡上浦町	ヒロシマへ行く
	温泉郡川内町	ヒロシマへ茶を買いに行く		南海部郡鶴見町	ヒロシマへ行く	
	温泉郡重信町	ヒロシマへ茶を買いに行く		南海部郡米津村	ヒロシマへ鍋を買いに行く	
	温泉郡中島町	ヒロシマへ茶を買いに行く		南海部郡弥生町	ヒロシマへ行く	
	伊 予 市	ヒロシマへ行く		南海部郡本匠村	ヒロシマへ行く	
	伊予郡中山町	ヒロシマへ茶を買いに行く		南海部郡直川村	ヒロシマへ行く	
	伊予郡広田村	ヒロシマへ茶を買いに行く		南海部郡蒲江町	ヒロシマへ行く	
	西宇和郡保内町	ヒロシマへ鍋を買いに行く		宮 崎	東臼杵郡北浦町	{ ヒロシマへ行く(人間) 鍋島に行く(動物)
	西宇和郡三端町	ヒロシマへ鍋を買いに行く				
	東宇和郡野村町	鍋島行き		福 岡	豊 前 市	ヒロシマへ行く
	北宇和郡広見町	ヒロシマへ行く			京 都 郡 菊 田 町	ヒロシマへ綿を買いに行く
北宇和郡津島町	ヒロシマへ鍋を買いに行く	糸 島 郡 前 原 町	チンガサキに行く			
南宇和郡御荘町	ヒロシマへ鍋を買いに行く	佐 賀	東松浦郡呼子町	ヒロシマへ行く		
南宇和郡城辺町	ヒロシマへ鍋を買いに行く		東松浦郡鎮西町	ヒロシマへ行く		
南宇和郡西海町	ヒロシマへ鍋を買いに行く		東松浦郡肥前町	ヒロシマへ行く		
土佐郡本川村	ヒロシマへ行く	長 崎	壱岐郡石田町	ヒロシマへ行く		
土 佐 清 水 市	{		ヒロシマへ米を買いに行く	壱岐郡芦辺町	ヒロシマへ行く	
			豊後へ行く	壱岐郡勝本町	ヒロシマへ行く	
日向へ行く	下県郡美津島町		ヒロシマへ行く			
宿 毛 一 市	ヒロシマへ行く		下県郡豊玉町	ヒロシマへ行く		
幡多郡大月町	ヒロシマへ鍋を買いに行く		上 県 郡 峰 町	ヒロシマへ行く		
上 県 郡 上 県 町	ヒロシマへ行く	上 県 郡 上 県 町	ヒロシマへ行く			
大 分	中 津 市	ヒロシマへ鍋を買いに行く				
	豊 後 高 田 市	ヒロシマへ行く				
	西国東郡真玉町	ヒロシマへ布を買いに行く				
	西国東郡香々地町	ヒロシマへ行く				

表 1 忌言葉「ヒロシマへ

県	市 町 村	表 現	県	市 町 村	表 現	
岡山	児島郡灘崎町	ヒロシマへ行く	岡山	大島郡大島町	ヒロシマへ行く	
	小田郡矢掛町	ヒロシマへ行く		玖珂郡大島町	ヒロシマへ行く	
	浅口郡寄島町	ヒロシマへ行く		熊毛郡大和町	ヒロシマへ茶を売りに行く	
	笠岡市	ヒロシマへ行く		新南陽市	ヒロシマへ茶を買いに行く ヒロシマへ豆腐を買いに行く	
広島	世羅郡甲山町	ヒロシマへ行く(便所)	山口	都濃郡鹿野町	ヒロシマへ行く	
	世羅郡世羅町	ヒロシマへ行く(便所)		山口市	長崎へ線香を買いに行く	
	三原市	ヒロシマへ行く(便所)		吉敷郡秋穂町	長崎へ行く	
	竹原市	ヒロシマへ行く(便所)		宇部市	長崎へ行く	
	豊田郡本郷町	ヒロシマへ行く(便所)		厚狭郡楠町	長崎へ行く	
	豊田郡安浦町	ヒロシマへ行く(便所)		美祿市	長崎へ行く	
	双三郡吉舎町	ヒロシマへ行く(便所)		大津郡油谷町	ヒロシマへ綿を買いに行く	
	双三郡三和町	ヒロシマへ行く(便所)		豊浦郡豊北町	ヒロシマへ綿を買いに行く	
	双三郡君田村	ヒロシマへ行く(便所)		豊浦郡菊川町	ヒロシマへ綿を買いに行く	
	双三郡布野村	ヒロシマへ行く(便所)		香川	小豆郡内海町	ヒロシマへ行く
	双三郡布野村	ヒロシマへ行く(便所)			小豆郡池田町	ヒロシマへ行く
	賀茂郡河内町	ヒロシマへ行く(便所)			三豊郡高瀬町	ヒロシマへ行く
	賀茂郡福富町	ヒロシマへ行く(便所) 下関へ行く(便所)			三豊郡詫間町	ヒロシマへ行く
	東広島市	ヒロシマへ行く(便所)			三豊郡仁尾町	尾道へ米を買いに行く
高田郡向原町	ヒロシマへ行く(便所)	三豊郡大野原町	ヒロシマへ米を買いに行く			
高田郡甲田町	ヒロシマへ行く(便所)	愛媛	伊予三島市		ヒロシマへ行く	
高田郡高宮町	ヒロシマへ行く(便所)		宇摩郡新宮村		ヒロシマへ行く	
佐伯郡五日市町	ヒロシマへ行く(便所)		宇摩郡土居町		ヒロシマへ茶を買いに行く	
島根	八束郡八雲村		ヒロシマへ行く		宇摩郡別子山村	ヒロシマへ茶を買いに行く
	仁多郡仁多町		ヒロシマへ行く		周桑郡小松町	ヒロシマへ茶を買いに行く
	大原郡木次町		ヒロシマへ行く		周桑郡丹原町	ヒロシマへ茶を買いに行く
	飯石郡三刀屋町		ヒロシマへ茶を買いに行く		東子市	ヒロシマへ茶を買いに行く
	飯石郡吉田村		ヒロシマへ行く		今治市	ヒロシマへ茶を買いに行く 西園へ行く
	飯石郡掛合町		ヒロシマへ行く	媛	越智郡魚島村	ヒロシマへ米を積みに行く
	飯石郡頓原町		ヒロシマへ行く		越智郡岩城村	ヒロシマへ米を買いに行く
	平田市		ヒロシマへ行く		越智郡伯方町	ヒロシマへ米を買いに行く
	出雲市		ヒロシマへ米を買いに行く		越智郡上浦町	ヒロシマへ行く
	簸川郡佐田町		ヒロシマへ行く		越智郡宮窪町	ヒロシマへ米を買いに行く
	簸川郡多伎町		ヒロシマへ綿を買いに行く			
	山口	大島郡橋町	ヒロシマへ茶を買いに行く			

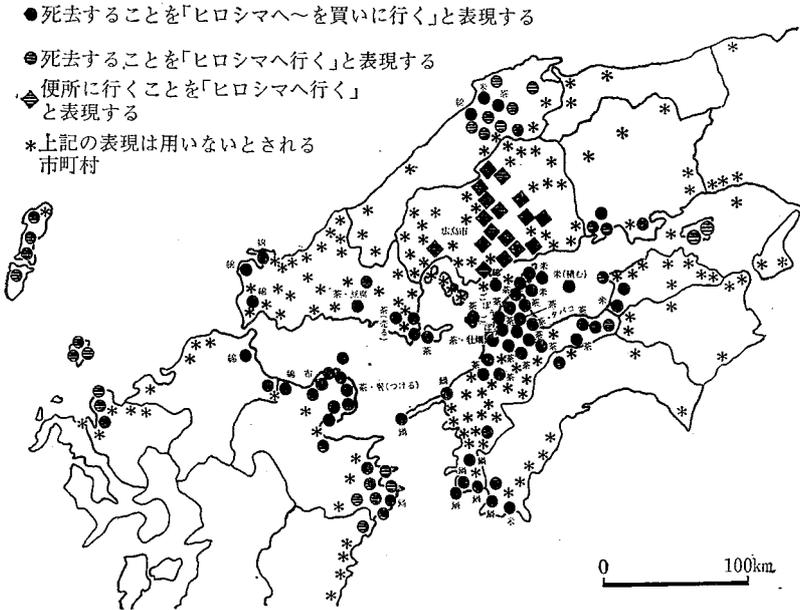


図1 忌言葉「ヒロシマへ行く」の分布とその用法

注) 図中に示した品目は、買物の目的とされる物品である。ごぼうは「掘りに行く」または「売りに行く」と用いられる。

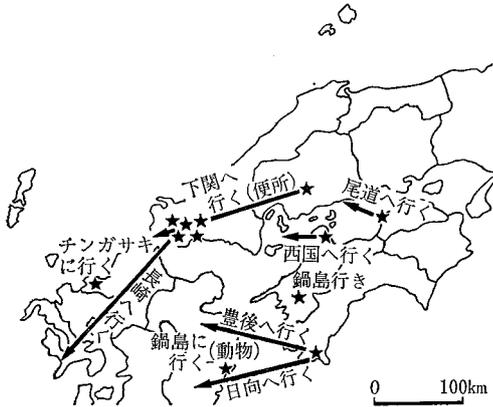


図2 他界を意味する忌言葉としてヒロシマ以外の行先が用いられる例

ことに比べ、「存在しない」ことの証明は難しい。したがって、図1は、分布の境界に関する精緻な議論よりも、分布の全体的傾向を把握する方向で利用することが適当である。

これらの点を考慮しながら「ヒロシマへ

行く」等の分布傾向を指摘すれば次のようになるであろう。

(1) 忌言葉としてこの表現が用いられる範囲は、主として中国地方西部・四国地方西部・九州地方北部ということが出来る。分布の東端は小豆島、西端は対馬である。沿岸部・島嶼部に分布する傾向が比較的強いが、内陸部の分布も認められる。

(2) 忌言葉には、「ヒロシマへ行く」と表現するタイプと、「ヒロシマへくを買に行く」と表現するタイプとが存在している。ただし、「ヒロシマへくを買に行く」を用いる地域では「ヒロシマへ行く」も通用することは、さきに用法の箇所述べた通りである。

(3) 「ヒロシマへくを買に行く」という表現は、分布全体から見ると、比較的 centro 部に近いところに位置する傾向がみられる。例えば、愛媛県北部の集中地域などである。それに対し、「ヒロシマへ行く」だけを用いる地域は、小豆島や対馬・杵岐など、比較的分布の外縁部に位置しているとみることが出来る。

(4) 「くを買に行く」という表現で入手の対象とされる品物は、茶・鍋・米・綿など一〇種類にのぼる。茶は、愛媛県東部から山口県東部、大分県東部にかけて多く用いられ、鍋は、愛媛県南部、高知県西部から大分県南部にかけて用いられる。茶と鍋の分布が地域的なまとまりを示すのに対し、米や綿とする地域は分散している。局地的な表現として、タバコ・ごぼう(牛蒡)・牡蠣・豆腐・鬢・布がみられる。動詞の部分は「買う」が一般的であるが、局地的に「積む」・「掘る」・「売る」・「つける」が認められる。

(5) 「死ぬ」に代わる表現としてではなく、「便所へ行く」に代えて用いられる例がある。この用法は、すべて広島県内に限られる。また、この意味で用いる場合には、「ヒロシマへくを買に行く」というタイプの表現はみられ



図3 「ヒロシマへごぼうを掘りに行く」を用いる地域とその周辺

ない。

(6) 広島市との関連からみると、距離的に相当離れた地域にも分布が認められる。例えば、対馬は直線距離にして約三〇〇キロメートルである。広島市に近い所では分布が濃密となる。また、広島市からみて東・西・南・北どの方向にも分布が認められる。

いっぽう、図2により「ヒロシマ」以外の行先が用いられる例をみてゆくと、次の点が指摘できる。

(1) 行先に「ヒロシマ」を用いる例に比べて分布が局地的であり、表現法の種類も少ない。しかし、「ヒロシマ」と同様、死去を意味する例や便所を意味する例がある。動物の死亡に限定して用いられる例もある。

(2) 鍋島・チンガサキなど、行先とされる地点が明確に比定できない例と、尾道・下関・長崎・豊後・日向など、行先が明確な例とがある。行先が明確な例では、いずれも用いられる地域からみて西方がその行先とされている。しかし、西方浄土思想との関連は不明である。

ところで、異なる表現相互間の分布の境界はどのようになっているのであろうか。図3は筆者の現地調査により、「ヒロシマへごぼうを掘りに行く」という表現の分布範囲を示したものである。図から「ごぼうを掘りに行く」を用いる地域は「茶を買いに行く」を用いる地域に囲まれて、この忌言葉に関する限り、一種の言語島の状態を示す。すなわち、「ごぼう」、「茶」それぞれの使用地域は、行政界が

等語線となつて明確に区分され、両者の間に漸移地帯は存在しない。ところが、愛媛県に関する方言区画論(16)や民俗地域区分論(17)において、この地域が一つの独立したまとまりとして区画されることはない。したがつて、この等語線は、「ヒロシマへごぼうを掘りに行く」という表現だけに関わる特徴を示していることになる。

言語や民俗事象が一線により画される場合、従来、その原因として自然的障壁としての河川(18)や、人為的障壁としての行政界、とくに藩界の存在(19)が重要視されてきた。すなわち、コミュニケーションのないことが言葉の地域差を生ずるという考え方(20)である。そこで、このような観点から、「ヒロシマへごぼうを掘りに行く」に関する等語線形成の理由について検討してみる。北条市と玉川町、あるいは菊間町と玉川町の間には、標高四〇〇メートル前後の山地がある。しかし、北条・松山市界、および菊間・大西町界では、臨海部に明確な等語線が存在するにもかかわらず、自然的障壁となるような山地・河川はない。次に、『旧高旧領取調帳』により藩領をみる(21)と、「ごぼうを掘りに行く」を用いる菊間町種・佐方、および北条市小川も、「茶を買いに行く」を用いる大西町別府・脇、および松山市堀江も、いずれも松山藩領である。いっぽう、大西町別府および今治市大浜では、どちらも「茶を買いに行く」を用いるが、前者は松山藩領、後者は今治藩領である。したがつて、藩領からこの等語線を説明することはできない。郡界をみると、旧風早郡の北条市と越智郡の菊間町が、郡が異なつても、ともに「ごぼうを掘りに行く」を用いている。ところが、同じ越智郡内で、菊間町は「ごぼうを掘りに行く」、大西町は「茶を買いに行く」を用いている。したがつて、郡界も等語線形成の直接的な要因ではない。同様に、市町村界も、北条市・菊間町界が等語線となっていない。また、近年の状況ではあるが、交通圏・小売圏などの機能地域区分によれば、北条市は松山の圏域に属し、菊間町は大西町とともに今治の圏域に属す(22)。したがつて、「ヒロシマへごぼうを掘りに行く」の例では、等語線をま

たいだコミュニケーションは、むしろ盛んであるといえる。

結局、北条市と菊間町に限定される「ヒロシマへごぼりを掘りに行く」の使用について、等語線は画定できたが、目下のところ、その成因を明確にするまでには至っていない。しかし、この等語線は、一般の方言区画や民俗地域区分とは異なる領域を示しており、その成因が自然的障壁や藩・郡・市町村界等の行政的障壁によるものでないことが判明した。また、今日の機能地域構造と一致しないことも明らかになった。これにより、等語線が自然発生的に形成された可能性は相当小さくなった。しかし、区画の明確さからみて、人為的な理由による成立が、なお可能性として残された。

四 「ヒロシマ」ト「ヒロシマ」か

忌言葉「ヒロシマへ行く」の「ヒロシマ」とはどこか。民間伝承誌上に発表された柳田国男の見解²³は、要約すれば、「ヒロシマ」とは世間を意味する古語であり、わずかに人々の記憶に留まって「死」の代用など特殊な用途にあてられた、というものであった。そして、「ヒロシマといふ語に、もしも斯ういふ感覚が伴なふことを知つて居たら、芸州の殿様も是を御城下の名にはしなかつたかも知れない」と述べて、ヒロシマの原義は、広島城が建設された一六世紀末にはすでに薄らいでいたと考えている。

柳田の見解に限らず、一般に語源に関する議論は実証が難しい。実証的な反論が出されない限り、傍証によって説明をしてゆく方法をとらざるをえないこともあり、「ヒロシマ」に関する柳田の見解は、この立場であるといえよう。柳田が取り上げた具体例は、愛媛県で「ヒロシマヘタバコを買いに行く」を用いるのに対し、彦岐では「ヒロシ

マへ行く」を用いるという二例であるが、これによって宍岐の用法がより古いと判断する背景には、いわゆる方言圏論がある。方言圏論は、柳田が提起した後、さまざまな検討がなされている。その結果、言語に関していえば、アクセントなど適用できないものもあるが、語彙や文法には適用が可能であると考えられている(24)。忌言葉「ヒロシマへ行く」は、用言「死ぬ」に代わる語彙であり、アクセントのように体系全体を問題にするのではない。したがって、この言葉の分布に圏論を適用させる試みは、方法的に正しいといえる。

そこで、図1を用いて柳田の見解を検討してみると、「ヒロシマへくを買いに行く」を用いずに、「ヒロシマへ行く」を用いる地域は、すでに指摘されている宍岐だけでなく、対馬にも及んでいる点が注目される。しかし、小豆島、岡山方面も「ヒロシマへ行く」が卓越しており、『蝸牛考』にみられるような京都を中心とした圏構造(25)は見出せない。それに対し、広島との関連でみると、まず、広島市を含む広島県域は、「便所へ行く」を意味する「ヒロシマへ行く」が集中している。そして、芸予諸島から愛媛県にかけては、「ヒロシマへくを買いに行く」が最も集中している。さらに、「ヒロシマへ行く」がその外周に分布する傾向にある。このように考えると、図1では、広島を中心とした圏構造を指摘することが可能である。国語学では、全国レベルの圏構造に加え、すでに各地において地方レベルの圏構造の存在も見出されている(26)。したがって、図1にみられる分布の構造を、このような地方レベルの圏構造とみてさしつかえないと考える。

ここで、さらに「地区連続の原則」(27)とよばれる一つのルールを導入してみる。これは国語学で提唱されたもので、同一タイプの言語(方言)が離れて分布し、その中間に分け入るように異なるタイプの言語が分布する場合、両側の言語は過去に連続分布していたとみなして、中間に挟まれた言語よりも成立が古いとするものである。図1では



図4 塩飽諸島における広島島の位置

「ヒロシマへ」を買いに行く」の分布地域を挟んで、東方（小豆島方面）と西方（九州方面）にそれぞれ「ヒロシマへ行く」が分布している。したがって「地区連続の原則」により、「ヒロシマへ」を買いに行く」よりも「ヒロシマへ行く」の方が、成立が古いと判断される。同様の方法で、「便所へ行く」を意味する「ヒロシマへ行く」は、「死ぬ」を意味する「ヒロシマへ行く」よりも、成立が新しいと判断されるのである。

さて、相対的に成立が新しいと判断された「ヒロシマへ」を買いに行く」という表現では、「ヒロシマ」は用務先として位置づけられている。すなわち、この言葉を用いる人々にとって、「ヒロシマ」は用務の足りる場所として認識されていたと考えることができる。現在、中国・四国地方には、広島とよばれる地名は二か所にある。一つは広島市であり、もう一つは、図4に示した塩飽諸島に属する広島である。塩飽諸島の広島は、現在は香川県丸亀市の一部で、面積約一二平方キロメートル、人口約二〇〇〇人の島である。廻船業で栄えた歴史があり、明治以後は青木石とよばれる花崗岩の採掘が盛んである。青木石は良質であるため、橋石などのほか墓石にも加工される⁽²⁸⁾。墓石という「死」にも関連するが、瀬戸内沿岸には愛媛県の大島など、他にも墓石産出地があり⁽²⁹⁾、広島だけの特徴とはいえない。過去も現在も商業機能の発達はみられないことから、「用務地」として認識される対象とはなりにくく、この地が「ヒロシマへ」を買いに行く」の「ヒロシマ」とは考えられない。

それに対し、広島市は城下町として建設されて以来商業機能が集積しており、「用務地」として認識される可能性は高い。そして、前述した

ように、図1に示された分布状況が広島市との関連で説明されることを考えあわせると、「ヒロシマへ」を買いに行く」の「ヒロシマ」は、広島市であると判断できる。

では、「ヒロシマへ」を買いに行く」よりも成立が古いとみられる「ヒロシマへ行く」の場合の「ヒロシマ」とはどこか。本稿ではこの「ヒロシマ」を、広島市ではなく、イメージのうへの抽象的な空間と考える。これは、結果的にほぼ柳田説³⁰とも一致する。以下、その理由を示したい。

(1) 「ヒロシマへ行く」という表現はあっても、「ヒロシマ」が広島であることを前提とした具体的な習俗がみられないこと。すなわち、「ヒロシマ」には各地から死霊が集まる形の表現になっているが、それを前提として行なう鎮魂、再生などの儀礼が広島には存在しない。また、死霊を送り出す側の各地においても、例えば広島の方角に何かを祀るということはない。

(2) 「ヒロシマへ行く」という言葉から、「どこか自分の知らない広々とした所に行ってしまった戻れない」というイメージを描く人々が各地に現存していること。ただし、地名としての広島を連想する人も多いことは、明記しておく。

(3) 杵岐や対馬が、政治・経済両面からみて広島勢力圏内に属した歴史をもたないこと。一部、対馬には、幕末に安芸国向洋からの漁民移動がみられたが³¹、瀬戸内漁民の他国進出は対馬に限られるものではない³²。また、対馬には、中世末から近世にかけて、和泉佐野、紀州熊野など上方から移住した漁民が多く³³、安芸の風習だけが広く浸透したとは考えにくい。

(4) 広島周辺より遠方の地域の方が、この言葉の使用が盛んであること。杵岐・対馬では、おおむね四〇代以上の

人々が「ヒロシマへ行く」を用いる。それに対し、他の地域では一般に六〇代以上の人々に用いられている。広島市と接触機会の少ない地域において、より幅広い年齢層の人々に使用されていることは、「ヒロシマ」が広島を意味しないことを示唆している。

(5) 地名「広島」は、この地に築城が開始された天正一七（一五八九）年の命名とされる。由来は、「当所を五ヶ村と申儀被改候へ、御家之広之字を頭に被置今度御馳走申上候福島之島と云字御取合広島と被名付候通被仰出たるより広島と申来候」（天正一七年、山泉源右衛門覚書）⁽³⁴⁾とある。すなわち、広島とは従前の地名「五ヶ」⁽³⁵⁾に手を加えたものではなく、毛利氏祖先大江広元の「広」と、重臣福島氏の島を組み合わせた造語ということになる。この史料が、築城開始の年と同年のものであるところからその内容を信用するに足るものと考えれば、命名の経緯からみて、「広島」が人々に幽境の地を連想させる理由を見出せない。したがって、地名「広島」と同音異義の「ヒロシマ」という語の存在を想定せざるをえない。ただし、広島築城の時代に幽境を意味する語「ヒロシマ」が存在したとすれば、毛利氏が、なぜ、あえて広島と命名したのか疑問が残る。この点の説明は、目下のところ十分に検討ができていない。ここでは、ひとまず身分による言語差を理由とみなし、庶民の用いた「ヒロシマ」の語を、上級武士層は用いていなかった可能性を考えておく。

以上の五項目から考ええて、「ヒロシマへ行く」の「ヒロシマ」は、現実の「広島」ではないと判断したのである。シマという語には、島以外に村落という意味もある⁽³⁶⁾。民俗語彙の「ムラ」とほぼ同様の意味である。「ヒロシマ」という語が、それ自体で「他界」を意味することからみて、「ヒロシマ」のイメージの原像は、自分の住む世界（ムラ）とは異なるよその世界（ムラ）で、山や川などの具体的な事物の存在が感じられない広々とした空間であっ

たと考えられる。イメージのうへの抽象的な空間が「ヒロシマ」であり、「他界」であった。ところが、後にこのような「ヒロシマ」が、同音である現実の「広島」を意味するものと認識されるように変化した。変化の時期は断定できないが、前後関係は、さきに国語学の知見を援用して示した通りである。その結果、「ヒロシマへ」を買いに行く」という表現が出現したとみられるのである。

「ヒロシマへ」を買いに行く」というタイプの表現では、入手しようとする品物のなかに、人々が「死」を連想するものが含まれている。「ヒロシマへ茶を買いに行く」の「茶」をはじめ、「タバコ」、「綿」、「ごぼう」などである。茶は、葬送の時に死者の首に茶袋を掛ける風習³⁹⁾に基づく連想のほか、香奠返しの商品として選ばれやすいことや、葬儀の席での接待風景から「死」が連想される。弔意を表す慰め言葉として「お茶でもおあがりなさいますか」と用いる地域もあり³⁸⁾、茶と「死」の結びつきの強さを示す。タバコは、休息の意味に代用される言葉である。聞き手が「安らか」という印象を受ける。「綿」もタバコに似て、「安らか」というイメージをもつ。「ごぼう」は地の底深くというイメージが「死への旅立ち」を連想させる。「黄泉の国」を連想する人もある。表1に示した「長崎へ線香を買いに行く」(山口市)の「線香」も、この例である。なお、「鍋」・「米」・「布」などのイメージは、目下のところ未解明である。

結局、もともと「他界」を意味していた「ヒロシマ」という語が、同音の混同により現実の「広島」として認識されるようになった。それに伴って「ヒロシマへ行く」という表現から「死」のイメージが薄れていった。そこで、新たに「死」を連想させる「茶」などの品々を加えられて、それを「広島」へ買いに行くという表現が出現し、「他界」を意味する語として用いられるようになったと考えられる。

五 民間起源説の存在と新たな「ヒロシマ」像

忌言葉「ヒロシマへ行く」の由来については、地域住民のあいだにいくつかの起源説が存在している。以下、その主要なものを挙げておく（なお、「」内は簡略化のために本稿で仮に用いた各説の名称である）。

(1) 「宮島説」 安芸の宮島は島全体が聖域であり、島内に墓を作れない。そこで、死亡者が出た場合、なきがらを対岸へ運び埋葬する。その習俗からこの言葉が発生したとする説。

(2) 「北向き説」 愛媛県今治市付近などでは、広島市が北の方向に位置する。そこで、北枕と同様に北の方角を嫌ったとする説。

(3) 「西方浄土説」 香川県および愛媛県の島嶼部では広島市が西の方向に位置するため、西方浄土の思想から発生したとする説。

(4) 「原爆説」 広島市には、昭和二〇（一九四五）年に原子爆弾による災禍があり、多くの犠牲者が出たことから言われるようになったとする説。

(5) 「宇品港説」 戦時中、広島市内の宇品港から出征した兵士の多くが還らぬ人となったため、言われ出したとする説。

また、「ヒロシマへ行く」が便所へ行くことを意味する理由としては、用便の意味の「ひる」と「ヒロシマ」とを掛けて、「ヒロシマ」あるいは「ヒルシマ」と言ったとする説「「ヒロシマ」説」。

これらは、いずれも民間起源説というべきもので、比較的多くの人々から支持されていることは、事実として重要

である。しかし、内容的には誤認や不十分な点がある。宮島説では、埋葬習俗の説明は正しい。宝永七（一七一〇）年の「厳島服忌令」には、死者を宮島の島内に葬ることを禁じ、対岸の赤崎（広島県佐伯郡大野町赤崎）に墓所を設けて葬るよう記されている⁽³⁹⁾。この習俗は、現在なお続けられているが、墓所の位置は一貫して対岸の赤崎であって、広島ではない。赤崎は、広島とは二〇キロメートル以上離れ、市街の連担はない。また、「広島」とよばれていたこともない。宮島・広島間に航路はあるが、参詣旅客用であって⁽⁴⁰⁾、なきがらを運ぶ棺舟の行先は赤崎である。さらに、茶・綿などを「買いに行く」という表現の存在についても説明できない。したがって、宮島説は起源説として疑問がある。

北向き説は、島根県北部など、広島が南方に位置する地域でも用いられる（図1）ことから、成立しないことは明らかである。西方浄土説も同様で、九州からみて広島は東方にあたる。原爆説は、宇品港説とともに、すでに終戦の八年前（昭和一二年）に山口麻太郎や柳田国男がこの忌言葉に関する紹介や論考を発表していることから、明確に否定できる。また、「便所に行く」意味の「ヒロシマ」説は、説明としては興味深い、何を目的とした掛け言葉であるのか不明な点がある。

このように、いずれも真の起源説としては認めがたいが、このような諸説が存在する点については注意を払わなければならない。とくに、原爆説の出現は、近年の平和推進運動などにより、広島という原爆を連想する人々が増大していることと関連があると思われる。戦前の山口・柳田両文献の存在が一般には知られていないこともあって、このような解釈が相当浸透している状況にある。忌言葉「ヒロシマへ行く」の分布について、各市町村教育委員会あてに教示をお願いした筆者の調査では、起源説として原爆を想定した例が五例あった。しかも、「悲しい思い出」を呼

び起こすとして「用いないよう努める」、あるいは「遺憾」とする例(市名村名は公表を遠慮したい)が存在している。筆者による調査依頼に対し、回答がなかった市町村のなかにも、同様の判断が含まれていた可能性がある。「ヒロシマへ行く」の本来の意味内容とはべつに、現在、このような解釈が広まりつつあり、誤解を防ぐうえからも注意を要する。

「ヒロシマへ」を買いに行く」の「ヒロシマ」は、現実の都市、とくに商都としての広島を想定するものであったが、原爆説にみられる新しい民間起源説は、広島市それ自体に「死」のイメージを求めたものである。このような起源説の浸透を考慮にいれば、結局、忌言葉「ヒロシマへ行く」の「ヒロシマ」には、図5に示すように、

第一段階(原型)——とくに山や川など具体的な事物の存在が感じられない広々とした世界(ムラ)

第二段階——用務の足りる町、すなわち、商都としての広島

第三段階——被爆都市としての広島

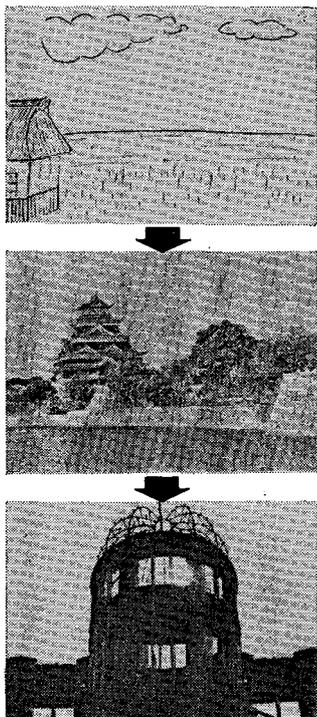


図5 忌言葉「ヒロシマへ行く」におけるヒロシマ像の変遷
写真の出典：後藤陽一『広島県の歴史』山川出版，1972，p.85(中段)および柳井乃武夫『瀬戸内海・山陽』日本交通公社，1971，p.14(最下段)

という、三段階の異なる認識像が認められる。本来は、第一段階に示すような、イメージのうえの抽象的な空間が「他界」の認識像であった。それが、同音からくる混同により、次第

に現実の都市広島として認識されるようになる。それに伴って、「ヒロシマ」を広島と想定した民間起源説が出現するが、「ヒロシマ」という語から受ける「他界」のイメージは薄れてゆく。広島は、商都として認識され、「他界」のイメージは、「死」を連想する茶・綿などの品々を忌言葉に加えることによって補われる。これが第二段階である。ところが、近年になって、戦争、とくに原爆の災禍を連想することにより、広島と「死」を直接結びつける第三段階の認識像が登場し、浸透しつつある。忌言葉「ヒロシマへ行く」にみる「他界」の認識像は、このような変遷を示している。

六 ま と め

本稿は、西日本で「死去する」に代えて用いられる忌言葉「ヒロシマへ行く」・「ヒロシマへ」を買いに行く」に注目し、この言葉を用いる人々による「他界」の認識像を明らかにすることが目的であった。研究の方法としてはこの忌言葉の分布を調査し、さらに用法上の特徴を検討して、「ヒロシマ」とはどこであるかを考察した。

結果として、これらの忌言葉は、小豆島から対馬にかけての瀬戸内を中心とした地域に分布していた。用法としては、「ヒロシマへ行く」が「便所へ行く」ことを意味する地域・「ヒロシマへ」を買いに行く」等と表現して「死」を意味する地域・「ヒロシマへ行く」と表現して「死」を意味する地域に区分でき、それらは、広島を中心に周囲に分布していることがわかった。国語学の知見を援用しながらこの現象を解釈してゆくと、「ヒロシマへ行く」は「ヒロシマへ」を買いに行く」よりも古くからある表現法であり、そこにみられる「ヒロシマ」の原義は、「よそ」を表す広々とした世界（ムラ）であると判断された。その後、このような抽象的な空間を表す「ヒロシマ」が、同音

の混同により、現実の広島として認識されるようになる。その結果、表現に「死」を連想する品物が加わって、ヒロシマへを買いに行く」等が用いられるようになった。商都としての広島像が、従前の「ヒロシマ」像に代わって出現したのである。

この忌言葉の起源については、宮島(厳島)における特異な葬制を起源として挙げるものをはじめ、いくつかの民間起源説が存在している。そのなかには、広島という地名から戦争、とくに原子爆弾による災禍を連想するものもある。「ヒロシマへ行く」という言葉は、戦前にも確実に用いられており、この起源説は事実を示すものではない。しかし、このような理解が浸透しつつあることは注意を要する。このことからみて、忌言葉における「ヒロシマ」像が近年再び変化し、商都としての広島ではなく、被爆都市としての広島が連想される傾向を認めざるをえない。結局、忌言葉「ヒロシマへ行く」にみる「ヒロシマ」の意味内容は、以上のような三段階の変遷を示す。これは、「死後の世界」、すなわち「他界」という、一種の「嫌われ空間」に対する認識像の変化としてとらえることができる。

現在、「ヒロシマへ行く」という忌言葉は、次第に消滅しつつある。しかしながら、なお多くの人々の意識のなかには存在している。この忌言葉は、たいへん誤解を招きやすい言葉でもある。とくに、広島周辺に居住する人々の中には、この言葉の存在を複雑な心境で捉える場合があるかもしれない。本稿は、学術的立場に基づく中立的な検討のみを行ない、この忌言葉が存在することの是非についての提言などはさし控えたいと思う。しかしながら、次の点は確認しておきたい。「ヒロシマへ行く」という言葉の原義や使用の歴史を考えれば、広島という現実の地域に、不当な劣等意識や差別意識をあてはめることはできないという事実である。

付記

本稿は一九八四年度歴史地理学会大会において発表した内容に加筆修正したものである。本稿の主題については横山昭市先生の御教示に負うところが大きく、作成にあたっては黒崎千晴先生・菊地利夫先生・千葉徳爾先生・田村正夫先生の御指導を頂いた。また、石田寛先生・脇田武光先生・高橋伸夫先生・五味武臣先生・田林明先生をはじめ、多くの先生・諸兄の方々から有益な御助言と励ましを賜った。調査対象地域各市町村の教育委員会職員各位には郵便による質問に親切に応じて頂き、現地調査で多くの住民の方々にお世話になった。以上、記してあつく御礼を申し上げる次第である。

注および文献

- (1) 本稿における忌言葉の用法は、次の文献の用法に従った。榎垣実『日本の忌みことば』岩崎美術社、一九七三、二三〜二四頁
- (2) 山口麻太郎『続老岐島方言集』一九三七初版(『山口麻太郎著作集』方言と諺篇) 佼成出版、一九七五、二四三頁
- (3) 柳田国男『広島へ煙草買ひに』民間伝承二一七、一九三七、一〜二頁
- (4) 具体的には次の文献を挙げることができる。
 - A、桂井和雄『俗信の民俗』岩崎美術社、一九七三、二二〇頁
 - B、井之口章次『日本の俗信』弘文堂、一九七五、六八頁
- (5) 具体的には次の文献を挙げることができる。
 - A、三宅千代二『伊子の俚諺とところどころ』伊予史談一三一、一九五二、二二頁
 - B、松岡利夫『人生儀礼』(和歌森太郎編『くにさき』吉川弘文館、一九六〇)、一三四頁
 - C、河野正文『葬送のしくみ』(愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 民俗下』愛媛県、一九八四)、四一〜四二頁
- (6) 横山昭市『広島をどうみているか―対岸交流地域「松山」からの広島像―』(広島県企画部編『地方の時代』における広島) 広島県企画部、一九八二、二三頁
- (7) 前掲(3)

- (8) 千葉徳爾「『ヒロシマに行く』話—ムラビとの広域志向性—」第三六回日本民俗学会年会発表要旨集、一九八四、六〇七頁
- (9) 「嫌われ空間」の概念や具体例については左記を参照されたい。
- A、小口千明「集治監を核とした集落の形成と住民の集治監像」歴史地理学紀要二五、一九八三、六四〇～六五頁
- B、小口千明「家相観にみる空間評価の相対性—埼玉県における『富士向き』伝承と易との対比から—」歴史地理学一二二、一九八三、一一頁
- C、小口千明「石風呂入浴慣行の分布とその衛生観」、「社会科」学研究八、一九八四、二二～二二頁
- (10) 島根県鏡川郡佐田町の例である。
- (11) 例えば次の文献を挙げる事ができる。
- A、柳田国男「魂の行くへ」一九四九初版、『定本柳田国男集一五』筑摩書房、一九六九、五五三～五六一頁
- B、谷川健一「常世論—日本人の魂のゆくえ—」平凡社、一九八三
- (12) ここではNHKアナウンサーの発音を一般的と考えた。
- (13) 笠岡市の例である。
- (14) 例えば『日本語地図』において、「ヒロシマへ行く」は調査項目の中にない。また、亀井孝「死に関する日本語について」人類科学一二、一九六〇、一九六～二〇八頁、は言語学の論考で、死の婉曲表現にも言及しているが、「ヒロシマへ行く」には触れられていない。
- (15) 未調査とは、調査票を発送していない地域のほか、調査票発送後、本稿作成時までに回答が到着しなかった市町村を含む。
- (16) A、鎌田良二「愛媛県西南部方言語法—語法境界の試み—」甲南女子大学研究紀要三、一九六六、二二～二二頁
- B、江端義夫「愛媛県の方言」『講座方言学八—中国・四国地方の方言—』国書刊行会、一九八二、三九七～四〇五頁
- (17) 森正史「民俗の地域区分と特性」(愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 民俗上』愛媛県、一九八三、五六頁
- (18) 例えば、長岡博男「民俗の地域差—加賀と能登の場合—」日本民俗学会報一七、一九六一、一～四頁、が挙げられる。

- (19) 例えば、日野資純「津軽方言と南部方言―青森県方言の区画―」言語生活七七、一九五八、七六頁、が挙げられる。
- (20) 柴田武「ことばの地域差」(大野晋・柴田武編『岩波講座日本語一―方言―』岩波書店、一九七七)、七頁
- (21) 木村礎校訂「旧高田領取調帳 中国・四国編」近藤出版社、一九七八、三三二～三三九頁
- (22) 藤目節夫「愛媛県の機能地域区分」横山昭市・深石一夫編『愛媛県の地域区分と地域設定に関する研究』愛媛大学地域社会総合研究所、一九八二、七一～七七頁
- (23) 前掲(3)
- (24) 金田一春彦「日本語方言の研究」東京堂出版、一九七七、八三～八五頁および一三五頁
- (25) 柳田国男「蝸牛考」岩波書店、一九二七初版、一九八〇再録
- (26) A、井上史雄「方言の分布と変遷」(前掲(20)所収)、一〇〇～一〇三頁
B、柴田式「解説」(前掲(26)所収)、二三〇頁
- (27) 前掲(26)A、一〇〇頁
- (28) 青野寿郎・尾留川正平編『日本地誌一八』二宮書店、一九六九、二二頁
- (29) 穂岡謙治「鉱産資源と鉱山」(愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 地誌Ⅰ総論』愛媛県、一九八三、四七七～四七八頁)
- (30) 前掲(3)
- (31) 竹内清文「宍岐と対馬」(岩本政教ほか編『日本地誌ゼミナール 九州地方』大明堂、一九六八、一四二頁)
- (32) 土井仙吉「九州(七) 水産」(藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説 近世編』吉川弘文館、一九七七)、四三頁
- (33) 前掲(32)
- (34) 広島市役所編集・発行『新修広島市史七』、一九六〇、八二頁
- (35) ゴカとは空閑地を意味する呼称であるといわれる。柳田国男「地名の研究」一九三六初版(定本柳田国男集二〇)筑摩書房、一九七〇、一二八～一二九頁
- (36) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典一〇』小学館、一九七四、七八頁
- (37) 山口県熊毛郡大和町の例である。

- (38) 日本放送協会編『全国方言資料五 中国・四国編』日本放送出版協会、一九六七、三四四頁に、愛媛県温泉郡川内村(現、川内町)の例が採録されている。
- (39) 藤井昭『日本の民俗 広島』第一法規、一九七三、一四〇～一四二頁
- (40) 宮本常一・神崎宣武「生産・生業・交通・運輸・交易」(広島県教育委員会編集・発行『広島民俗資料緊急調査報告書』、一九七二、六四～六七頁)